



西洋雜記
四

洋学文庫
文庫 8
C 309
4



西洋雜記卷四

目錄

印度小鳥の説

南亞墨利加の大鳥の説

地生羊の説

海牛の説

アチムナイム獸の説

亞墨利加の異猿の説

ドトアルス鳥の説

白孔雀白雞白猪白熊の説

西洋雜記卷四

印度の異木の説

鐵島水樹の説

太懶毒辣の説

アダムス。アツフルの説

象并象牙の説

オポツシユム獸并セミヒェルバ獸の説

亞弗利加の大獸の説

アソウハ獸の説

大蟹の説

水蛇の説并水蛇石の説

雞石の説

西洋言語の説

硝子を柔よする法

屋室并拐糞の説

西洋疝瘡の説

西洋産婆の説

諛談

藥を服せしむるよく飲食をせしむる方

薔薇をしりて香竈をしらしむる法

卵中の文字を書するの法

石上よ文字をなす法

金の量を重くする法

猩ニ絨を染むる小蟲の説

ゴウテ。ヒツスの説

則意蘭島の異草の説

工鄂國の奇鳥の説

西洋雜記卷四

印度小鳥の説

印度の地は一種の小鳥を産れ。其を「キュアイシム」と
名く。波^ポル杜^{ルト}瓦^ガル^ル國^ノ人^ハよんで「ペカフロル」といふ。其羽毛
甚美麗なり。全體の大き僅は蝗^{イナガ}の如く。頭の大死さハ
櫻子の如く。喙ハ黒く。長く尖り。直^{スガ}は其細き
線の如し。足ハ全體に比す。甚小なり。色黒く。尾も
長く直り。僅は三四羽あり。此小鳥の羽毛甚滑澤
光彩あり。日映する時ハ其美麗なるを。常は



倍り。印度の人此鳥を佛像の前は蓄ひく。是は餌を諸花を以て相傳ふ性きもめて花を好く。其地方花少る候は至るバ喙を以て樹幹を穿ちて孔を作り。其中は入る隠れ蟄して動らざる。半年餘花盛なる候を待ちてすかち出づとす。

南亞墨利加の大鳥の説

南亞墨利加洲露等の國一種の奇異なる大鳥は産り名を「コンドル」といふ。此鳥の身軀きもめて大よして能羊を攫みく高飛り其翅を開く時ハ一方の翅端より一方の翅端まで長さ凡五「エルレン」及一「エルレ

に四分の三よりなる者あり。一「エルレン」ハ此方の曲尺二寸四分餘の事なり。五「エルレン」四分の三より大

尺は當るなり。其足は爪なり。故は足を以て人物に害となす。其あはれ然も喙ハ甚尖利なり。よく

牛皮を透す。つて一牛を此鳥二隻空より飛下り左右より牛皮を刺透して殺せるとあり。また或小兒を刺殺して攫み去りてある。此鳥其羽ハ黑白斑文となりて。其冠は黒色なり。頭は冠あり。黯褐色なり。前はむらして垂る。其形ハ鴈吐後雞に類して。其色赤。露等の人神を祭ると。此鳥の羽を供して福を祈るといふ。

の羊の皮を採り中とちりて頭を包み其他衣服器用
 玩好の物となれり。またついで此羊熟するのちろあひつち
 狼らの獸来りて是を咬むんと欲す。故に土人心を用
 て諸の野獸を防ぐ。甚密なり。然して其皮を歐
 羅巴洲中より輸すものハ贖物なりとて先哲す。多
 く是を明白せり。いふんとあはれバ皆東方印度の邊
 より生ずるところの大羊の胎内より羔の皮を剥き取
 りて偽造するものなれり。其草茎は生ずるところ
 の羊皮の真物の如きは歐羅巴洲においそハ是を見る
 稀なり。

右ハ「ト、子ウス」が本草および「ウライツ」が醫學
 寶函に載するところの説にして其言ふところ本
 草綱目よりしる地生羊と大抵相同し。故に今下
 本本草綱目および史記の註に載するところの説
 を録してついで考證する所なり。

本草綱目羊部附録に曰。地生羊出西域。劉郁出使
 西域記以羊臍種于土中。溉以水。聞雷而生。臍ニ與
 地連。及長。驚以木聲。臍乃斷。便能行。齧草。至秋可食。
 臍内復有種。名壠種羊。段公路北戸録云。大秦國有
 地生羊。其羔生土中。國人築牆圍之。有臍與地連。割

之則死但走馬擊鼓以駭之驚鳴臍絕便逐水草吳
 菜淵頴集云西域地生羊以脛骨種土中聞雷聲則
 子從骨中生走馬驚之則臍脫也其皮可為褥一云
 漠北人種羊角而生大如兔而肥美三說稍異未知
 果種何物也當以劉說為是然亦神矣造化之妙微
 哉

まゝ史記大宛傳の註小宋膺が異物志を引く曰
 大秦之北附庸小邑有羊羔自然生於土中候其欲
 萌築塙繞之恐獸啖食其臍與地連割絕則死擊物
 驚之乃驚鳴臍遂絕則逐水草為群と見えたり。

海牛の説

亞墨利加の海中一種の獸を産り名けく「マナチ」といふ
 和蘭の人ハ「セエグウ」といふ海牛といふ義なり是すちらち一種の
 身體不具の獸なり其前の二足ハちきをを用ゐるものなり
 頗手は類す全身赭色其頭顱ハ野羊に似て口を犢牛
 類眼小鼻孔大よして耳ちり尾ハ短くして圓し
 體の大き牛の如しそれ大なるものは長さ一丈五六尺徑
 七八尺に至るものあり恒は海中に生ざるところの草を
 食ふ其頭中ハ石あり色白くして鈍圓其形象骨は類
 似香氣もよび味なり主治もつら痛を止るに用ゐる腎

あよび腰痛拘攣癩疝瘰癧等は用ゐる効有りまゝ外傳の藥もも用うるもよし。

「アテムナイム」獸の説

アフリカ洲中利未亞奴未第亞等の地においゝ其人多く「アテムナイム」といへる獸を畜ふ其大さる犢牛の如く形ハ羊に似たり耳たゞくうらよ垂る毛短くして甚柔よ乳汁甚多し身よカ有りくよく人を負く行よ足る此獸他は異なるものハ牝なるものも角ありて牝はうへつゝ角たゞくうらよ。

亞墨利加之異猿の説

南亞墨利加洲伯西兒マラゲナン等の地よ一種の猿を産り名きて「カヨウ」といふ全身毛甚多く灰白色の長髪あり眼黒く耳禿よ尾ハ甚長くその面貌ありて老人よ肖りたり。

「ドトアールス」鳥の説

印度亞の属島「マウリシウス」の地よ一種の大鳥を産り名けて「ドト」ます「ドトアールス」といふ「ストロイス」ホーゴル鳥駝の種類なり或もつて天鷲の種といふその頭よ膜皮有りて是を掩ふと「モンニキ」僧官の名の戴くとあるの中よ似たり故よます號して「モンニキ」スワーニと

ワスワリンハ天鷲其形状ヤ、駝鳥ガに似テ、マツク吐殺雞セキノ類
ス。此鳥肉甚多ク、一セキ隻の肉を以テ、よく百餘人
の食に供するも、是る其味もまろ甚美なり。

白孔雀白雞白猪白熊の説

北方ゴ返寒の諸地方、殊に歐羅巴洲モウロツパノル勿入亞國ノルモニアの地、
おびく、一種の白孔雀を産ル、羽毛を以テ、奇麗ニ、
其雌あるもの、雪深キ山中におびく、卵を雪中に藏め
テ、よく是を生育ル、又一種イの白雞あり、名けく「ス子エウ
フウイン」といふ、雪雞その大さ鳩の如ク、性又雪を食のむ
まろ莫斯哥未亞ムスゴウおびく「エイヌランド」に、白猪白熊と

産一カマツク卧兒狼徳ケルンランドの海中に、一種の稍白色なる鯨クジラを
産ル、おびく「ウ井ツテ」ヒツス白魚と名く、盖北方の寒地
におびく、白蛇生類を生ずるも、南方黑人國の人ハツツ、及
まろ雞イとマツク、黒蛇と相反セリ。

印度の異木の説

東方印度の地、一種の異木を産ル、其樹枝東にむふ
まろハ、大良薬なり、諸般に病患に用ゐる、極め効あり、
西にむふまろハ、大毒なり、誤り服まろバ人を殺ル、
其理詳まろまろを得ずといふ。

鐵島水樹の説

アフリカ ビレドレカルト
 亞弗利加洲皮カ土ル熱利土國の南海中は十餘島の
 り。總稱して「カナアリア」といふ。みな伊斯把亞國の
 王に屬し其最西は「ヘルロ」と名くす。エイ
 セル。エイランド」と名く。共は鐵島といふ義なり。此島
 は一種の奇樹を産じ和蘭の人呼んで「ワートル」ボオム
 といふ。水樹の義其枝葉恒は清水を滴下し若日光を受むと
 其水滴ると最多し故に土人とも桶鉢の類を多く樹下
 に置きて其水を受く。此島中絶えず水泉ありといふ。と
 て此水を日用に供し少くも事を缺くことありといふ。造
 化の功妙なるを故に稱して聖水といふ。ちよ一千四

百零二年 日本應永九年。唐土明の フラリス
建文四年。至午に當る。 小拂郎察國「ホルマンデー」

の人ベテニコウルトといふ者。此島より入り。此水の奇状を
 見て其著すところの書に記録してより。諸の西書その
 水の事を載るもの甚多し。ドト子ウスガソとく。是猶
 我歐羅巴洲所産の「リンドウ」草日露の義の日中に至ると
 ば水を滴下して地を濕すが如きものなり。然るに我より
 彼島に至りて。此奇樹を観ることを得ぬ。故に此理を
 詳に窮むることを得ずと記せり。

太懶毒辣の説

意太里亚國に屬する。那波里國の内「タレント」の地および

其近傍西齊里亞哥尔西加等の諸島、一種の毒蟲を産じ、あそを名けく太懶毒辣といひ、又ステルリオ子スといふ。和蘭の人ハ呼んく「ドルレス。ピニ子コッフ」といふ。狂蜘蛛クモとす。あそをもち蜘蛛の類なり。人をもあそを螫サシさす。其毒は、いづきか、則狂す。如く或舞ひ或歌ひ或怒り。或笑ふ。故に此症を名きく「ラテン」の語。タラチ子ス。ミスといひ。和蘭の語。ダンス。シ井キテといふ。ダンスハ舞踏なり。シ井キテハ病なり。あそを療さる。ハ其病人を轎子ケウの中に入きく。四隅は綱をつけく。高き処懸けく。是を推廻す。きハ、其の轎子旋轉センして、あそを此時におい。人その傍

に在り。其病人の平生好むところの樂を奏すとて、病人すた。あそを醒く。平愈れ。然しそのもち藥をいづく。是を治すといふ。

「アダムス・アップル」の説

和蘭語、佛手柑を謂て「シットルウン」といふ。其一種大なるもの。アダムス・アップルといふ。其状橙橘トウキツの類と同く。いづく。橙子より大なる。二三倍。外面ハ少の斷紋タンモンあり。拾人の齒をいづく。咬カきたる状。同是太古の世。世界開闢する時。人の始祖亞當アダム。此菓三枚を取り。是を喰ひ。嚙カき。故に名けく「アダムス・アップル」

フルとリふ。そのものも「ヨーテン」の人上古の如徳亞人の子孫有り。上巻に見ゆ。みな家畜として毎年此菓一枚を採りて其神に供ふ。故にまゝ此菓を世に稱して「ヨーテン・アップル」といふ。

象并象牙の説

ヒブ子ルスが萬國傳信紀事よりて、象ハ西語「オリハン」ト云ふ。「エレハス」といふ。あき四足生類の中におびく。最大且猛。又靈慧ありて、まゝよく人より馴れ、其役使するところも後ふ。其天性野猪龍鼠および燕を惡む。枕ガ五雜組曰象畏鼠。謝在印度および亞弗利加洲の人ハ此獸をりて戦は用ゐる。つゞそれ上は騎るをもたらし。此獸二の長牙ありて

口よりして外は向ひて出づ。是すたゞもち世より知るるもの。その「エルペンベエ」なるもの。又其鼻甚長し。是を名きて「プロポスミス」といふ。その鼻をりて人の手をつつふ。諸般の事は用ゐる。此獸多く亞細亞洲中は産れ然して殊に多く。亞弗利加洲の亞毘心域。莫拿莫太巴。モノエモギー等の諸王國の地および則意蘭島は産れ。按。輿地圖説。セイランの象ハよく人語はく其を解し重きを荷あり遠きを致すといふ。はく其最大のもののハエ鄂國より産れ。此國より出ればその象其牙二百餘斤の重さありて上卷のあはれ。象ハ其壽よく一百五十歳を促つといふ。ウライイツが醫學寶函に曰。象ハ大獸にして東方印度

おのび黒地兀皮亞エナオヒア アフリカ洲諸國の地は産人其牙
 を藥用は供するがためは生藥舗より是を求む是を名
 ぞく「ラテン語」エビュルカニといふ和蘭語は「エイホール」
 といふ此牙甚大ありてその徑ワタリおのび圍カニもすく是は稱
 ふ其外面ハ黄ありて裡面ハ白し其獸大小はさうして
 此牙の大小輕重あり故は其重さ五六十「ポント」より
 して或百餘「ポント」よりある者あり「ポント」ハ量の名藥用の
九十六錢なり詳然して其牙の状全をものと彼産する
下卷に見ゆ地方より我歐羅巴ヨーロッパは輸イタ來る者おとを名ぞく「エド
 ルインテグリウム」すく「インフラグメンタ」といふ醫家よ

おのび屑スリケンとすく是を用ふおとを「ラテン語」ラシ
 ラ。エホリスちんらびは擦象といひ和蘭語は「グラスプト。エイホール」といふ
ちんらびは義おの屑チンラビすく諸種の熱症黃疸ガシおのび脾肝二
 臟の閉塞クワイするは用おく功あり其外尚おとを火に焼く
 用おくものありおとを名ぞく「エビュル。ウストム」といふ此
 品チンラビ二種を分つ其一ハ火氣を外に洩モクく久く焼き白
 色となすものなりおとを「フポチウム。エキスエボレ」と名
 く其内外面ともは白くして量重く質柔脆ジウヤクありて美カシき
 鱗節チンラビをすの此物よく閉塞するもの功ありすく或おとを
 製して錠となすならびに下利諸症は用おく甚妙なり

まろよく白帯下を治す其ニハ象牙を壺中ニ固封ト
 て焼くる者ありて其色甚黒一世ノ又或象牙ハ似る
 の大牙を土中より掘得る者あり其物又外面ハ
 黄くして裏面白く是を舌上ニあけバ舌ハ粘著すけ
 だ。此の土中より得る者ろの象の牙ハ似る者ハ
 豈象牙の久く土中ニ埋むる者ニシテ土氣薰蒸してかくの
 如く軟なるもの至るもの或膏腴ある土氣自然ニ凝成
 して牙の如くなる形を結ぶものなり。即掘出すの象牙
 窮理の學家ハ此「エビユル」ホツレレ」とり義あり
 を定めく「ウニコルニユ。ホツレレ」と其功用を同じうす

ウニコルニユ。ホツレレハ堀出すの一角なり。てその
 土中より出る者あり。詳ニ医学空函ニ見ゆ。盖此方より龍骨
 の類なり。

オポツシム獸并セミヒルバ獸の説

亞墨利加洲加里巴納諸島の地ハ一種の獸を産ル。名を
 「オポツシム」といふ其大さハ猫のごとく喙ハ大アテ下顎ハ上
 顎よりハ短く喙の状ハあつても承ハ類似其爪も鋭
 尖利なり。樹木ニ爬上する。速たなり。よく
 鳥を捕へ。是を啖ふ其牝一産大抵六子を生む其腹ハ袋
 有り伸ぶべく縮むる。恒ニ其子をその袋中ニ入る
 乳する。是と出づ。牡なる者ハ腹ハ袋有りて

其の牝^{ヒシ}と多きけく其子と袋中に入きく行き走るなり
まゝ^{アフリカ}亞弗利加洲は一種の獸なり「セミヒルバ」と名くそ
の形狼より異なりびろの牝とるもの肉囊ありその胸
は懸る恒より子と其内に入きく行走すといふなり
の類なり

アフリカ 亞弗利加の大獸の説

アフリカ 亞弗利加洲「バムボク」國の西方「カツタ」「ヤカ」等の地は一
種の大獸を産れ名々「ギアマラ」といふ其大さ象よ
半倍なり其頭頸^{クイアモラダ}恰駱駝に似く背は二の大瘤^{ホネ}あり其足甚
長く行歩甚高し頭は七の角あり各長さ二尺餘色黒く

して其状牛角に類し性獷悍なりといふ人も人或ちきと
畜し養ひ押してめてよく重^{オモク}を負ひ遠きまで致れたり行
歩はなほ速なり是は飼ふの食料や駱駝の食料と
類し其の肉は黒人の後につく美味とするといふもの
なり

アソウハの獸の説

又亞弗利加洲は異獸あり名けく「アソウハ」又「シアカリ」と
いふ此獸つゆ人の墳墓をほき其屍を出して是を
食ふなり

大蟹の説

亞墨利加洲アメリカ伯西兒國ブラシリア一種の大蟹を産び名々ギニアツヒニムヒニムとりふ其螯カサを開くと死ハ其大さ人の股モを開きさが如くは糸塘メウ中に穴を穿カちて是は居り時とてて陸地を行き天り雷鳴すとバ則ち此蟹穴より出づ人是を見ぎ大は號呼して衆を聚めて是を捕つてはつて食料もあつ其味極めて美たりとりふ

水蛇の説并水蛇石の説

意太里亞イタリアカラブリアカラブリアの地の水中に一種の蛇を産び名々ホアとりふ其形甚大なり小犢トクを見ぎバ則ち飛でちを廻繞してその血を吸ふ人は是を咬かまうとバ其

腫脹シエタウ甚大なりむろ一つ邏馬ローマのカラウゲウス帝の世にあつて人は此蛇を撃つち殺し其腹中にあつて人の全身備もたる者を得しとありとりふ

テモンガテモンガ奇方秘苑に曰く水中に生ずる蛇を捕つて其尾を樹木に縛づ其頭を下りて掛けあく時ハ其蛇早りとバ一時遅けれバ一二日の間にあらば一の石を吐き出す是を水を盆子に盛り蛇頭の下にあき其石を盆中に受ちて尚其水中に漬けて暫時あらうてのちハ石を取り出さして水腫を病む人の腹上にあつてむすびつけてあつて蛇ハよく腫氣を除き去るとりふ

按よ太平

廣記は狐珠を取るとを載
け、すこぶるちきと似たり。

雞石の説

まろく奇方秘苑いひまろく、ハー子ン。ステーン和蘭語ハー子ン
も、雞ちりステエニハ、石ちりも生きまろく四歳を経る雞の肝中よおひて、時とて
生ずるまろくの者より、其大さ豆の如し、質透明な
るも、恰水晶のおと、是甚貴むる處の物より、戰場よ
臨む時など、是を口中よ含めば、あまろく渴するまろく、且
よく敵よ勝とつふ、リュウテマンリウテマンまろく、旅行せし時、途
中よ、渴よ苦みまろく、人ほりて、此石を贈る、因て是を
舌上よのまろく、試まろく、即時よ渴止みまろく、

先年予が友人、まろく、雞肝中より、此石を得、以
て予よ問ふ、予以為、まろく、雞の誤りて、石を吞み
まろく、ものなまろくと、後よ、此書を讀みて、始めて、此
石なるんことを知る、當時よ、是を識らざりて、其
功を試みず、て、やまぬまろく、恨むべし、惜むべし、

西洋言語の説

萬國傳信紀事よ、曰、歐羅巴洲中諸國、其言語の原始、まよ
び三種あり、第一ハ、ラテン意、太里亚の中よ、あ
り、舊都の名なり、語なり、まよ、
意、太里亚、拂郎、密、伊斯把、你、亞、等諸國の言語、由て出ると
し、まろく、第二ハ、入、尔、馬、泥、亞、語なり、まよ、和蘭、諸、厄、利、亞、

第那瑪デーチマルカスエア加雪際オシカ亞等諸國の言語由りて出づるところ
 あり。第三ハ「スラホニア」オシカ第馬泥亞國帝畿の州郡なり。語なり。
 おも博厄美亞翁加里亞波羅尼亞莫斯哥未亞等諸國
 の言語由りて出づるところなり。

按、海を「ラテン」語も「マレ」といふ。拂郎察フランスも
 ハ「メル」といひ、伊斯把イスバ亞も「マル」といふ。
 書籍を「ハル馬泥亞」も「ハブツク」といひ、和蘭オランダも
 てハ「ブツク」といひ、第那瑪デーチマルカ加も「ボツク」とい
 ひ、諳厄利亞サンガリアも「ハボツク」といふ。
 右の如き小異ありて、其原ハみな土地より

一轉音のこゝろ入セルマニアデーチマルカ爾瑪泥亞第那瑪加
 語を、和蘭オランダの語を参考する。其語多く
 ハ相似あり。諳厄利亞サンガリアの語も中異ありて、おも
 らし。同からぎ教て多し。諳厄利亞サンガリア國其歴世の
 沿革エンカクよりて、其語音もさうさう變シて、
 西書より詳あり。おもこの事、少し考
 ふる。おも私録する者ありとす。おも
 尚稿カウを脱ダツす。おも得トク他日是を詳シすべ
 し。録す。故に此書ハおもを略して、其大凡を説シめし。

硝子を柔ユルする法

「シヨメル」が保家全書小曰野羊の血を以て硝子を烹
 ると云ハ其柔たると蠟あるハ白煙の如くよなるなり。
 此時人その心の欲するが如く、つぎの形はありとも
 造りてのち、是を水中に投ずまば、堅きことすく初如
 し。しよ。硝子ハ和蘭語「カラス」としよ。ラテンにて
 ハ「ヒートロム」としよ。我邦にて「ビードロ」としよ。あ
 ラテン語の轉音なり。又按は西洋にて硝子を造る
 と其原始極め久すたも、ち太古洪水よりも以
 前の事なり。罷鼻尔の高臺を建し。すてよ多
 く処ニは硝子を用るしとなり。

屋室并扱糞の説

歐羅巴洲ハ人家之石を以て造建レ故は火災絶え
 る稀なり。其木のをりて造るものハ下賤の家な
 り。又彼方厠糞を掃除するもハ、ならび夜をりて
 して、白晝天日の光あるとあはれ、てハ決して糞を掃
 りて、故は和蘭語ハ扱糞人を謂て「ナクト」。ウ
 ルケル」としよ。ナクトハ夜なり。ウエルケルハ業
 をたす者としよ。やなり。

西洋疔瘡の説

和蘭語ハ疔瘡を呼んで「スパン」ポツク」としよ。「スパン

又^イ斯把^パ你^ニ亞^ア國^ニなり。ポツク^クしてすべ^ク瘡^カを^シ。

瘡瘡をキンデル。ホツク

 諸國^ニハた^テ此病^ヲる^ル。

ボス「イタリヤ」國の人より。伊斯把你亞王の臣なり。始めて。より

龍「アメリカ」洲を見出^ス。其の事別卷に詳^シなり。

 始^メす。

ア「メ」リ「カ」洲を開^キ。時^ニは、此^ノ是^ニ相^シ後

ア「メ」リ「カ」洲を至^リ。軍卒等^ニ多く^ク彼地^ニあり

此病^ヲ患^ヒ。國^ニ歸^リ。伊^ス把^ニ你^アの地

此病^ヲ傳^フ。夫^レより^テ他^ノ歐羅巴^ニ諸國^ニは流傳^セ。故

たりのといふ。その傳^フの始^メ。西史及^ビ彼邦^ノの医書^ニ詳^シなり。

西洋産婆の説

ホルランド

 和蘭^ニ産婆^ヲを謂^フ。フルウド。フロウ^ト。

「語^ル。オブステチリキス」

「ソ^ノ此方^ニ及^ビ支

那^ノソ^ノ穩婆^トハ甚^ニ異^{ナリ}。その「フルウド。フロウ」

ソ^ノ女^ハ少^シ。時^ニ終身^ニ不^レ犯^ス。種^ニの戒行^ヲを

保^シ。尼^ノの意^ニなる者^{ナリ}。ソ^ノ蓋生^ヲを重^ンド姦

を防^グの意^{ナリ}。

謹談

彼方^ニ謹談^ノ類^{ナリ}。今^ニ其^ノ一二條^ヲを左^ニ記^ス。

 一處^ニ女^{アリ}。夫^レを孕^ム。

何^レ人^カを詰^ル。

 曰^ク。誰^レ人^トと私情^ヲを通^ス。

答^テ曰^ク。私情^{アリ}。

何事もなす。曰す。夫婿なり。私情をくして。何と以て孕めるや。處女のソコ。時ニ「ナクト。メルレイ」あり。豈ちその感して然るものなるらん。「ナクト」ハ夜ナク。メルレイハ北馬ナク。ニ言と合して。夢は魔をよみたり。ソコ。ちと「メルレイ」をたら。らバ「ベングスト」なるん。「ベングスト」ハ牡馬ナリ。
 一酒徒あり。酒を嗜むその甚ち。よりて。其眼を患ふ。醫師カルドウアといふ人。ちとを戒め。曰。足下の病。ちと酒のちと。ちと酒を禁ず。酒徒曰。我酒を飲め。果して眼を損び。然と。酒を飲まざれば。寂寞なはず。我身を損す。寧小なる。

窓を閉塞して。むろ。大なる家を壊損せしめ。めんと欲するもの。

薬を服せしめてよく飲食をすむる方

奇方秘苑曰。凡食飲を失ふ者。多くハ胃の敗壞するより。後。他の諸病を生ず。至る。治。易らざるの症。より。て。ちと。居恒膳。食す。何と。な。た。豊饌美味。對す。又是を厭ふの意あり。強いて食。吐逆する者あり。予が一親友。一の園圃を管する。醫官の許。赴。て。奇異

非常の藥草を觀ると甚多し。此時におひく。常は有るとさうの草は一種の駭く^{オドロ}處に功あることを知りてふ。ちよ其園の園丁^{エニテイ}我友人を導き^{ミナビ}て。此貴重なる苑圃をよく悉觀せしめしむるより。我友歸るものぞみて。是を謝するも。貨をとりてせしむる。彼園丁より一箇の秘事。藥を用みず。よく飲食をさくむるの法を傳へしり。ちよいんとなも。此時は我友人數日以前より飲食うつしくすまざるの症を得て。なやむより。此事をこの園丁よかきり。園丁をなもち。茵陳草^{インテン}を兩手掌は捧げ來りて曰。此葉を莫大小の中。および履の裡足蹠^{ウラ}の

ツチタ

下のいさおいて。毎朝其新なる葉をいさひて。初の葉を除くべし。然らば則能食することを得。いと友人是の後。いさひて。右の如くも。果^ミて。平癒せり。其後いさひて。予もす。此症を患ひて。諸食物を吐^トて。やむ。温^{ヌク}なる食物の香と。輒^カち。忽^ト嘔吐^{オウト}を催^{モト}す。よ。偶^{オウ}此事を彼友人は語り。友人の曰。此方信ずる。足らざるが如く。いと。我さきよ。彼園丁より。此方を受け用み。ま。病はえ。効を得。る。となも。ば。ま。つ。ち。よ。を。用。み。試。し。ら。る。べ。し。と。い。ふ。より。予。す。な。も。ち。茵。陳。草。を。採。り。て。其。葉。を。莫。大。小。の。中。へ。入。り。

毎日葉を換へて是を試むる。凡二月有餘して病
全く癒えし。食する事二人を兼ねる。いづれ便知
る。あま真よたぐひなきなる経験の良方にして且ち
行ふ事又甚容易。茵陳草の如き。都鄙を論せば
處は随ひてな多く得べし。然るやたハ別は藥也服
さる事なく。且諸貴重なる健胃の藥及び拔尔撒摩
等の貴品を重價を以て購ひ求むるも及ぶ。此
容易ある方を以て失ひしる食飲を元よ復するを豈
一奇快あらばや。予すてはさきよりしてのち恒ふ
む。是を以て功を奏するよりして一二の親友は此法

を教ふる。たゞの聞きたるハ皆笑ひて信せざりし。試
みて後ハ大に効を得りて感謝を受くる事多かり
しなり。

薔薇として香竄たる法

同書曰予が友ハ一園丁なり。かつ把理斯拂郎察國の都なりの
地に旅行するよりして予に薔薇を贈る。少の旅用の
貨とす。園丁は予に是を報ずる。薔薇として太
芳香する。此法を傳へり。其法は薔薇樹の
附近におひて葱ヒトモシを土中ササキに挿入する。其の薔薇樹株の
多少は後して葱の多少は應じて多少なり。然る

と此ハ薔薇ハ非常の芳香有りて其花より採るところ
の露すゝすゝをなすごとく香竈サンよよつ薬用よ入るて功最大なる
を以て製薬家殊よ好んく是を購アキテふたり

卵中よ文字と書するの法

同書よ曰ち此も戦争の時節よ有りて遠方へ秘事を
告んとするも其間の道路を敵人阻絶ツセツしてあへて信を
通しうべきの節よ用あるものなり其法没食子と明
礬とを酢カよくとじり卵の殻上よ字を書くとよく
是を乾カう〜其後三四日間ちまき成法よ此酢の中へ投
してのちよ又ちまきを乾カう〜遠きよ送る途中よて人

きを見るもあへて知るもなり〜彼方よ送り至るよ及
いて彼カレその卵の殻を去るバ白上よ文字有りて事辨ハ
べ〜また明礬没食子並びよ酢を以て殻上より書き
よ〜ちまきを乾カう〜てのち其卵を鹽水中よ投して
煮ると一時此方の半時むらりすまバ殻上の字ハ消散して
中の白よ字存するなり

又一方新なる卵をや久〜酢の中よ投しおけバ殻
柔よなる此時「ラシット」カ機を以て長くちまきを裁サイ
て其中よ小紙牘ウチを納る酢より出さ〜あきバ卵キレよ
たび堅〜卵のきれめをば石灰サイを以て塗るべし

志うきども塗りくるとくろくちとバ自見とやきく。前の法よきうん。

石上の文字をなす法

同書小曰一の石を採りてよくあきをほらるめ。蠟を溶して其上よ字を書し。是をつよき酢よ投すこと十
二時^{此方の六時}ゆして石を取出しその上なる蠟をよきを落せし字石上よ存してあへく消えぬといふ。溶恐鎔誤其下疑脱數字
按よ草木子よ云。龜尿^{テウ}可以和墨寫字入石と。貝原大和本草附録よ此説を載せし日本よ昔佛經と石よ書くよ其文字久く脱せしハ此法なり

といふ今も其石つり。本朝食鑑よ龜尿を取る法。漆盆上よ置きて鏡を以て是を照せし出づ。一説よ蒼耳子油を以て墨よまきり。文字を書せば石中よ入りて長く脱せぬ。或曰芸香^{オナモミ}を油墨よ入り。蛤粉の末をまきり。石よ書せば脱せぬと云。其事稍似るるやあは。是よ附記け。

金の量を重くする法

同書よ曰新なる馬糞を採りて其汁を搾り出しよきよ黄金を投し後是を出せば則其量よく重くなるなり。猩ニ絨を染める小蟲の説

狸ニ絨ハ「コシ子ルラ」といふ小蟲をとりつゝ其血をもつて
海め成すと云ふものなり。今西書所載の説を採り。
左ニ翻譯して考證よ具ふ。

ウライツウ醫學寶函曰「ラテン語「コシ子ルラ」といふ
「コシニルラ」といひ和蘭はちきと「コシセニエリ井シ」とい
ふ其形小く扁平一片三角あるハ四角は分ちて
顆粒をたゞ外面ハ銀色より裡面ハ赤し。伊斯把你
亞國の人多く西方亞墨利加洲より得來る其物多く
無花菓樹に附く。字露國（亞墨利加の中にある大國）の人
心を用ゐてちきを採取し、まづ諸厄利亞國の人テイソシ

ガシをく「コシ子ルラ」ハ即小蟲の一種ありて無花果樹
の葉に附て生じ。今生藥舗中ちきを分けて四種と
する。其第一ハ拂郎察國の人呼びて「ラゴセニルシ。ステ
ク」に似し。是すなまら我輩恒は多く見ると云ふもの者
あり。第二ハ「コシオ子ルラ。カムベシカナ」と名く。上よ
いふ第一種のものより比ききバ粒ニ聚りて塊をなす。色
ハ他品より最赤くして且不潔のもの多く其中よ
雜をれを。第三ハ「コシラ子ルラ。テトレカツラ」と名
く。ちきハ平地に産する者より。カムベシカナ（未詳。再
ミカナハ樹の名なり多く北アメリカ
の地に産し。もつて染料となる）の下よあつて是を得るな

り。第四バウ井ルデ。コシ子ルラ」と名く。是ハ大葉の
 地榆木の根の下において、ちきを得るなり。凡右の四種
 して第一種の者を以て、上好の品とす。藥局の中、ちきを
 以て「アクツア。ヒツタ」藥水の名を製し、或胃の病に用う。その
 藥水よ色をばけく、赤うくしめ、又小水を通す。良藥
 とし、染匠、專是を用ひく。種ニの段足の類を染むるをなむ。
 ヒブ子ルスガ萬國傳信紀事よ曰、「コセニルレ」又「コシ子ル
 ラ」まゝ、「コシニルラ」と名く。其色赤くして、美麗なり。ち
 き即一種の小蟲の乾きて化生するものなり。その形
 「ウエエグ。ロイス」木虱の類よ似たり。ちきを壓し、ちきり出た

の液汁ハ、染匠以て色を染むとす。そのものなり。此物
 多く、亞墨利加洲中、産し、すなはち、無花果樹に似
 る一種の樹上、附生し、亞墨利加の土人、哆囉絨を以て
 其樹下、布たて、のち、其小蟲をちきり、落せば、則此
 蟲よく速く死す。ちきり、ちきり、世よ名ありて、人の貴重
 する。とちきりの「コセニルレ」ちきり、然も、此物特
 亞墨利加の地の産物なり。ちきり、ちきり、ちきり、ちきり、
 瑪尼亞國中、ホレイゴニムムの地「シント。ヤン」といへる所の
 邊の樹下、おいて、一種の赤くして、大さ穀粒の如き
 の城産し、世よ是を名き、ちきり、「ヨハンニス。フルウド」といふ。

是を以て人を誑アサムれて、真正の「コシニ子ラ」なりと稱して貿易ハウエキし。此赤粒の如くなるものハ、まづ他物あらざるウリカヒ。ちよ一種の蟲の卵なり。ちよを暖處に置き、日光を受けしむまば、則よく生育して蟲となる。此蟲血の如くなる赤液汁あり。ちよを以て絹帛羊羴等を洗む。まづ都兒格國および亞爾默尼亞國の人ハ「ホールセヨーデン」の地より多く「コツキユス」一名「カルミン」といふ。本書と極よまざる。コシ子ラは似る。一種の葉なり。を購ひ得て、以て哆羅絨絹布皮革等を洗む。是を名ちて「サウヒア」といふ。まづちよを以て馬の鬣タテガミおよび尾を洗むるなり。藥局の中にてちよの

キユスの汁を搾り出だして、以て「ケルメス」汁に代へ用ケルメスは似る樹なり。其實ハ藥に入る。その功は花をのたす。う。ケルメス上ケルメの製法の如くよまをきして、キユスとアルケルメススよおなの製法の如くよまをきして、其功少らばとしく。我輩は佛郎察國より出だすとらちの汁を見るよ。全く「コツキユス」の汁にして「モント。ペルリール」の地佛郎察國の縣邑。少おして此蟲をちよめ製する。ちよのちよ。藥用は供して、其功ハ「アルマニヤ國」より出だる者と異なるなり。ならびよ元氣を補助するの良藥なり。まづ此「コツキユス」の汁は、新なる佛手柑汁を加へ製し

て其氣を引いど。ちきや紙よ漬して顔料となれ。ちき
 を「カルタ。ヂ。ス。バグナ」と名く。まゝ是類よ。べセツタ。リュ
 ブラ「ラテシ語リニブ」一名「フランケット。ツクク」と名くる者
 あり。和蘭語「フランケット」ハ顔料なる類なり。は。此汁よ漬して製する
 と。ろのものなりといふ。

まゝボイスが學藝全書を按よ。「コシ子ルラ」蟲其
 形半圓なるがごとく。其種類す。多し。第
 一種ハ赤翅の上よたぐ。二の黒點あり。第二種も
 赤翅の上よ長く白筋及び斑點あり。第三種も
 赤翅の上よ七の黒き斑點あり。此種ハ「アンゲリヤ」諸厄利亞國

中よ甚多し。名け。ユツフロ。クウ。と。第四
 種ハ。翅黄よ。第五種ハ。翅黒。ちきら。皆翅の色。及
 び斑點よ。類を分つものなり。其書唯翅の事と載せ
 他事と累ハ故に附するの

ゴウテ。ヒツス「和蘭語」の説

ゴウテ。ヒツス「和蘭語」ハ金「ヒツス」ハ魚「ヒツス」なり。一種の小魚よ。清き
 湧水の中小生して。形状美麗なり。其背金色よ。腹
 ハ銀色よ。兩傍ハ赤色なり。黒き斑點皮上よ散在。尾も
 幅廣く。金黃色よ。其肉ハ柔よ。味美なりといふ
 此方よ。此金魚と稍相似る。則意蘭島の異草の説

山村才輔著

嘉永元年戊申三月刻成

日本橋北十軒店

江戸書林 鈴木文苑閣 播磨屋勝五郎藏板



